

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

和解のためにイエスは十字架を取られた



聖木曜日、イエスはイスカリオテのユダにも、和解への道を示そうとされました。聖金曜日、ご自身を犠牲にして、罪の責任を負わなくて済む方法を探っていた残酷な宗教指導者たちにも和解の道を残してくださいました。

十字架上の死をもってしても指導者たちは和解に応じなかったのですが、唯一「イスラエルの教師」とイエスから呼ばれたニコデモは、アリマタヤ出身のヨセフとともにイエスの遺体をユダヤ人の習慣に従って埋葬してくれました。ニコデモはイエスのうちに光を見だし、初めてイエスを訪ねたときから光に照らされて生きていたのです。

さて「ヨハネによる主イエス・キリストの受難」の朗読全体を見渡したとき、「働きかけるイエスの姿」が受難の主日の朗読よりも強調されているのに気づきます。兵士たちと下役がイエスを捕らえようと近づいてきたとき、イエスは声をかけました。「だれを捜しているのか。」

イエスを兵士たち下役たちから守ろうと大祭司の手下に打ってかかったペトロにも声をかけました。大祭司カイアファのぶしつけな質問にもていねいに答弁します。ピラトにも、問いかけの何倍もの返事をしています。

裁判が終わって十字架のもとでも、母マリア、愛する弟子に声をかけます。これらはすべて、和解のための働きかけとなったのです。イエスをあからさまに拒む人にも、怖くてイエスの弟

子であることを公にできない人にも、泣きながらイエスに従う人にも、和解のためにイエスの働きが必要です。ご自分の人としての最後の時間をすべて使って、和解の手を差し伸べてくださったのです。

「和解の手を差し伸べるイエス」は、最後に十字架にはりつけにされました。実際にそうだったかは別として、手のひらに釘を打たれた姿は、「和解の手」「差し伸べられた手」が、今も私たちのために開かれているからでしょう。

この釘打たれ、開かれたままの手を見て、ここに集まった私たちは何を考えるのでしょうか。中田神父は、「差し伸べた私の手を取り、和解に応じて欲しい」と願っているように思えます。血まみれになって和解の手を差し伸べてくださる主に比べると、自分はなぜ血まみれになろうとしないのか。恥ずかしくなります。

「恥も外聞も捨てて」という言い方がありません。イエスが十字架の上で示す姿そのままです。私たちはいつになったら、信仰のためならイエスと同じ姿になっても構わないと考えるのでしょうか。信仰によって招かれた生き方に、いつになったら命をかけ、血まみれになる覚悟ができるのでしょうか。

私たちはすべてを与えられた者なのに、すべてを与えてくださった方にすべてを委ねることができないあわれな身分です。それでも十字架上のイエスは、今も手を開いて、私たちに和解の手を差し伸べておられます。開かれたイエスの手を取るか否かは、私たちに委ねられています。